

「伝える」ということ

管理職になるまで、国語の教員として、「書くこと」を授業に取り入れてきました。生徒に課題を与えた時に、最も多かったのは「書くことがない」でした。しかし、よく聞いてみると本当に書くことがないのではなく、先生に「伝える」ために書くことはない、でした（苦笑）大抵、授業で書く作文やその類いの文章は、教員しか読まない。教員しか読まない文章など書く意欲は湧かないし、本当に伝えたいことを書きたくても書けないということでしょう。

教員となって初めて赴任した学校の教え子から、社会人になって最も苦勞したのが、社内文書を作成することだったと聞かされたことがあります。実際、大人になって文章を書く際に必要なのは、「事実」を正確に伝えること、原因と結果など、根拠を示して説明すること。某コメンテーターがよく言う「それ、あなたの感想ですよ」はいらない訳です。そうしたことを学校ではなぜ教えないのか、と。

ところが、小学校以来、作文を書くときにはそうしたことは、ほとんど教えてもらえない。例えば、遠足に行って、長い距離を歩いて「疲れた」とか、遊んでいるときに友達とケンカになって「つまらなかった」とかいう（都合の悪い）事実、書くと大抵修正されます。そうした指導を受けることで、子供たちは本当に「伝えたいこと」を封印してしまう。だから「書くことがない」となってしまうのではないか。これは、ある作家が言っていたことですが、全く同感でした。

2 校目の学校では、書いた文章は必ず学年全員の生徒が読むこと、具体的な根拠をあげて意見を述べることを決めて、生徒に書いてもらいました。書いた生徒の名前が出なくても、他の生徒が読むとわかっていると、変なことは書けません。最初はお題が決まっていた、それに従って嫌々ながら書き始めますが、他の生徒が書いていることがわかって刺激を受けると、「自分もこんなことを書いてみたい」、という気持ちが湧いてくるのか、回数を重ねる毎に生徒が書く文字数が増えてきました。そのときから、書きたいこと、伝えたいことがあれば、人は自ら書くのだと実感しました。

本題に移ります。「珠文」は昭和 52（1977）年 3 月に創刊号が発刊されていますが、生徒会誌となる以前から「珠文」の名で文芸部によって刊行されていたようです。校長室には、最も古いもので、開校 10 周年記念号の「珠文」が残されており、生徒の作品として作文や随想、詩、短歌、俳句が掲載されています。「斜内山道」「ある日の午後」「俺の自転車」などの作文は、ごく平凡な内容にも思えます。しかし、沿革に記載された「高校設置を要望し（猿払と中頓別の間に位置する）交通の要衝浜頓別に存置する浜頓別小学校の一隅に感激の開校式を挙げた」その興奮冷めやらぬ時代です。当時の高校進学率は 57.7%（全国平均）、戦後の復興のもとでともに高校で学べる喜びや、何気なく過ごす日常に感じられる「伝えたいこと」はいくらでもあったのだと思います。

さて、SNS など多様な表現の手段が活況を呈する現在、人々には「伝えたいこと」がなくなったわけではないようです。今年の「珠文」にどんな「伝えたいこと」が溢れているかを楽しみにして、巻頭の言葉とします。